

## 第8回全国スポーツクラブ会議 in 南相馬 報告

期日:平成26年5月17日(土)~18日(日)

会場:ロイヤルホテル丸屋

### 17日(土)

#### 1. 挨拶

- 江本節子(第7回全国スポーツクラブ会議 in 南相馬実行委員長)
- 太田光秋(福島県議会議員)
- 桜井勝延(南相馬市長)
- 森岡裕策(文部科学省スポーツ振興課長)

#### 2. オープニング

- ①詩の朗読
- ②貯筋運動

#### 3. 基調講演

##### 安藤美姫トークショー「日本スポーツのゆめ」

※進行係、江本実行委員長が同席し、鼎談形式で行った。

- ・子どもの頃から絵画やピアノなど多くの習い事をしており、友人に誘われ、習い事の1つとしてスケートをはじめたのがきっかけだった。そこで教わった先生に憧れ、他の習い事を全てやめてスケートに熱中した。先生に夢をもらったことがきっかけで、自分も夢を与えることができるスケートのコーチになりたかった。
- ・日本ではルーチンワークのような指導だったが、海外のコーチは体調や精神状態によって指導メニューを日々変えており、それに刺激を受けた。
- ・スケートという種目は、スケートリンクが無いと出来ないのも特別なイメージを抱かせ、一般には少し手を出しにくい種目だが、これを機にぜひスケートにも関心を持ってほしい。
- ・喘息持ちなど肺機能系の病気を持つ人には、スケートはとてもおすすめ。(清水宏保選手や羽生結弦選手も喘息持ち)適度な湿度がいいらしい。自分も偏頭痛持ちだったが、スケートをはじめて軽減された。

#### 4. シンポジウム

##### 「総合型夢先案内人」

- コーディネーター:江本節子
- パネリスト:澁谷茂樹(笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所主任研究員)  
松田雅彦(大阪教育大学付属高等学校平野校舎保健体育課教諭)  
南木恵一(NPO 法人 SEIBU スポーツクラブ)

- ・夢を語るためには、まず現状をしっかりと認識することが大切である。
- ・毎年文科省が行っているクラブ実態調査は、あくまで国が国の施策を自己評価するためのものであり、現場のクラブにとって本当に必要な数字ではない。何のための数字なの

かを明確にして、クラブに必要な数字を収集する力が必要。

- ・平成 14 年～平成 25 年の toto 助成事業「総合型地域スポーツクラブ活動助成事業」による助成金累計額は、約 148 億円にのぼる。ちなみに、平成 25 年度の文科省調査によると、全国 3,493 クラブのうち、toto 助成事業を受けたことがあるクラブの割合は、48.3%である。
- ・スポーツに「復帰」する人を、総合型クラブで増やしたい。
- ・総合型クラブ政策の一番の功績は、「総合型クラブが無かったらスポーツを通じた地域づくりに関わることは無かった」という人を掘り起こしたことである。
- ・自分たちが行っているスポーツ活動にはいくらかかるのかを計算して、きちんと会員に伝え、その分のお金を受益者負担でしっかりいただくこと。いつまでも toto には頼れない。
- ・クラブはもっと自己評価をすべき。
- ・病院の待合室に高齢者を集めてはいけない。
- ・クラブの評価基準として「自分ならこのクラブに入りたいかどうか」を杓子にしている。
- ・クラブと政策と、両輪となってやっていくべき。

## ○ディスカッション

### ①運動とスポーツはどう違うのか？

1人でどこにも所属せずに行うことができるものを運動として捉えている。

### ②クラブとは違う第三者(民間等)の強い介入があるのではと危惧している。

地域にクラブとして定着し、「おらがクラブ」として応援してくれる人を増やすことが大切。また、総合型クラブのみに固執せず、それぞれがそれぞれの形や価値観でスポーツを楽しんでいいと思う。会費については、民間では厳しいがクラブの会費なら何とか払えるという人もいるだろうし、「この金額なら払えるけど、これ以上は厳しい」という感覚も地域によって異なると思う。そう考えると、まだまだクラブにとっての潜在人口は多くいると思う。

→NPO 法人格を有している地域スポーツクラブがあるが、NPO 団体だからといって「公益」とは限らない。例えば、町道場でも法人格を持っている所がある。行政が法人格にとらわれずに団体の活動を判断する力が必要。

○ディスカッション後、「夢先後追人」として、会場から2名、自分の夢を語った。

## 5. 分科会

### 「クラブのゆめ」「私のゆめ」

※1 グループ約 10 名に分かれて、ファシリテーター進行のもと、クラブの夢を語った。

- ・NPO 法人格を取得して自立し、次世代にバトンタッチをしたい。  
→頑張っても黒字を出しても、次年度の toto 申請の負担金として消えてしまう。
- ・人口が 8,500 人を切ったので、医療費削減に貢献したい。また、スポーツ少年団に入っていない子ども達への支援も行いたい。  
→「運動したくてもお金が無いから行けない」という高齢者に対して、クラブの運営も考えつつどう支援していくか。
- ・人口 12 万人の都市で、現在会員 2,000 人。将来は、2%の住民に会員になってほしい。
- ・文科省から、中学校や高校に対して「地域でスポーツをするように」声をかけてほしい。
- ・クラブの 1 年間の活動をビデオにまとめて、「この活動を続けたいので、会費を値上げして

もいいですか？」と会員向けに上映会を開いた。数名は退会したが、ほとんどの会員は残ってくれた。

- ・クラブのサークル、教室ごとにボウリングチームを作って交流している。
- ・運営が苦しくなると、「いかにして稼ぐか」という方に意識が言ってしまう。しかし、組織の自主運営が目的ではなく、クラブのミッションが目的。目の前の事に追われると、ミッションを忘れそうになるので日々気を付けたい。
- ・地域の学校が廃校になる。学校が無くなると、地域のコミュニケーションが激減する。クラブがその代わりに担いたい。

### <1日目写真>



### 18日(日)

#### 1. クラブのゆめ自慢大会

江本実行委員長が参加者の中からランダムに選んだ約 15 名がステージに登壇し、クラブのゆめや自分のゆめを語った。

#### 2. プロ直伝シンポジウム

○コーディネーター: 黒須充(順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科教授)

○パネリスト: 内田満(福岡県クラブアドバイザー)

祐末ひとみ(大阪府クラブアドバイザー)

板垣昌行(うつくしま広域スポーツセンタークラブアドバイザー)

・アメリカの NPO で成功するための3つの条件は、「明確な理念・多様な資源・活発な理事会」である。

→理念には、「どこの誰の何のために、いつまでにどこで何をするのかを明文化している。「決められない」理事会を打破する。

・現在、日本体育協会配置のアドバイザーのうち、11年目のアドバイザーが3名いるが、全員九州ブロックにいる。

- ・福岡県では、34 項目のチェックシートを作成し、点数化してクラブの認証を図っている。
- ・市民の人が主体的に「できること」を増やしていく。
- ・総合型クラブは今後、「多種目・多世代・多志向」に加え、「多機能」であるべき。
- ・「自立」の1つの指標としては、「個人の家ではなく、「公に仕事ができる場」を持っているかどうか」であると言えるのではないか。
- ・アドバイザーとして自立をしてもらおうと考えても、結局は現場の人が自立したいのかどうかで決まる。
- ・実際に地域に関わることのできない県職員やアドバイザーが、直接地域に干渉しすぎている。クラブのやりがいや、企画・運営の楽しみや喜びをアドバイザーが奪ってはいけない。
- ・総合型クラブは仕組み作りであり、「こういう基準を満たしていないとクラブではない」という考えはナンセンス。
- ・クラブ担当者が異動して異なる部署に行っても、熱意ある担当者であればクラブに事業を落としてくれることがある。
- ・福島県のクラブでは、全体の約65%が toto 助成事業を活用しており、全国的に見ても toto 助成事業への依存度は高い。
- ・クラブの強みは、「地域が味方についている」ということ。スポーツだけやっていたらいいという時代は終わりに向かっている。

### ○ディスカッション

①クラブに対し、どう指導・助言をしているのか。ここだけの秘密があれば教えてほしい。

板垣:現場運営の視点に立ち、情報交換をとにかく大切にして、クラブについて根掘り葉掘り聞く。

祐末:大阪では、5段階(創設期・成長期・安定期・展開期・支援期)のクラブ支援評価指数を作っており、その段階によって支援方法も変えている。

内田:クラブ関係者は、情報が欲しいというよりは「話をしたい、聞いてほしい」という人が多い。適切な質問をしてあげるスキルが重要。

### 3. 閉会式

「第9回全国スポーツクラブ会議」の開催予定は以下の通り。

開催日:平成27年5月16日(土)~17日(日)

会場:大社文化プレイスうらら館(島根県出雲市大社町)

主管:NPO 法人出雲スポーツ振興21

## <2日目写真>



## <所見>

「全国スポーツクラブ会議」には、クラブアドバイザー1年目の「第6回全国スポーツクラブ会議 in 田辺」から参加しており、3回目の参加であった。今回の軸は「夢」、クラブの夢や自分の夢について語り合うことで、初心に帰り、クラブや自分自身を改めて見つめ直す機会となった。

安藤美姫氏の講演もさることながら、シンポジウムの内容が1日目・2日目共に大変参考になるものだった。特に2日目のシンポジウムは、パネリストが全員クラブアドバイザーというこれまでにないスタイルであり、同じ立場として考えさせられることが多かった。パネリストは全員同じ立場であるにも関わらず、所属県のクラブ育成状況等に応じて独自のスタンスでクラブのサポートを行っており、その内容は全く異なるものだった。また、クラブ関係者からクラブアドバイザーになった者とそれ以外のクラブアドバイザーとで「クラブのサポート」というものの考え方が異なっているように感じた。

その中で一番心に響いたのが、「クラブのやりがいや楽しみ、喜びをクラブアドバイザーが奪ってはいけない」という言葉である。自分自身、もともとクラブ運営に興味があつて現職に就いたため、とにかく現場側に立って物事を考えるよう心がけていたが、どのクラブにも属さず、県という立場だからこそできることが本来クラブアドバイザーとしての自分に求められている事であり、自分の立ち位置とやるべきことを明確にしなければならぬと実感した2日間だった。次年度の島根県出雲市にも、ぜひ参加したい。